

○ 職業人としてふるまっていますが、とつきの出来事に対応するときなどに、気づかないうちに自分本来の姿が現れることがある。

× ハ 置かれている立場が切り替わると、生き方やものの捉え方が大きく変わり、その人の生のあり方が一変してしまう。

○ 二人は、その時どきにふさわしいモードを使い分けて生きているが、ときおりそうした使い分けに失敗してしまうこともある。

○ ホ モードの混乱は、傍から見ればユーモラスな光景となる場合も多いが、思いのほか深刻な結果をまねくこともありうる。

現代人が見失ったもの

第二問 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

① 小さい頃の私は、東京の世田谷に残る武蔵野の残像のなかで遊んでいた。そこには、わずかではあったが、まだ小川があり、雑木林があり、農家や江戸時代からつづく土地の人々の暮らしがあった。しかし、そこには何かが無かった。後に私は、その何かとは、私にとっての「里」であると感じくようになる。

② 現代人は知性でものを考える習慣をもっている。その知性は、いつでも前向きだ。知性は未来へと人々を誘う。まるで未来に無限の可能性があるかのごとく。その可能性の何分の一かを手に入れるべく歩いていけと知性は教える。それにしたがうかぎり、「里」も「田舎」も必要なものとは感じられない。このような意味で、現代人とは、知的な動物である。

③ ところが、知性を媒介としない人間の精神の領域は——私は確かにそれはあると思っているのだが——、たえず帰る場所を探している。それをうまく表現できないから、そのことを私は、魂は帰りがたっている、と表現しておく。

④ もしもそうだとするなら、現代人においては、知性と魂は不調和でありつづける。知性は前に向って歩こうとし、魂はどこかに帰ろうとする。とすると「里」や「田舎」をもたなかった私は、はじめから、魂の帰りがたっている場所をもたないことにはならないか。

⑤ 里を「ソウシツ」した人間。それは魂が帰ろうとする場所をもたない人間である。ところで、「帰る」という言葉は、私たちの社会では、独特の「ヒビき」をもっていたよう

〔出典〕

内山 節
『里の在処』

〔著者経歴〕

- ・北海道大学
- ・山形大学
- ・東京大学
- ・京都大学
- ・島根大学
- ・鹿児島大学
- ・立教大学
- ・南山大学
- ・同志社大学

7
 な気がする。たとえば、故郷を「ふるさと」と読んでも、「くに」と読んでもかまわないけれど、「故郷に帰る」というとき、人々は単に出身地に行くことだけを表現してはいなかった。故郷は出身地であることに変わりはないが、故郷に帰ることによって人生をやりなおすという意味を、この言葉はふくんでいた。

5 私たちの社会では、帰るとは、やりなおす、元に戻す、という意味をもっている。そのことを明確に示しているのは、最近の歴史学、あるいは歴史社会学の研究である。なぜ日本の歴史では、徳政令がたびたび公布されているのか。一揆をおこした百姓たちは何を求めたのか。そこに、一度元の状態に戻すという意志は働いていなかっただろうか。もう一度、やりなおせる状態に帰ろうとする、そこに、日本的な改革の思いが存在していたのではなかったか。

6 帰ることによってやりなおす。それが伝統的な改革の精神であるとするなら、「故郷に帰る」という言葉もまた、帰ることによって人生をやりなおす、自分の存在を変えるという意味をもっていたはずである。そして、だとすれば、帰る先である故郷とは、人生をやりなおすことのできる場所だったのだから。

7 とすると、私にとって「里」とは何か。それは魂が元に戻ることでできる場所である。すでに述べたように、そのようなものを魂と表現するのは不当なのかもしれない。私は魂とは何かを知らない。それが存在するかどうかもしらない。それに、私が書いている魂とは、霊魂とも違う。とりあえず魂と書いておく他に、書きようのないものである。

3
 8 「里」には、とりあえずそう書いておく他ないものが、いくつかあるのではないだろうか。たとえば、自然。この言葉も不適当な気がする。なぜなら明治時代に外来語の自然を意味する言葉を日本語に訳するために、自然という言葉は無理矢理あてはめられた。ところが、人間の外にある自然体系を表現するのが外来語の自然であり、伝統的な日本の言葉遣いでは、自然を人間の外にある客観的なものとはみていない。それは人間と時空とともにするもの、相互性をもちながらともに存在しているものであり、万物の動きのなかに、自然も人間も同じ時空のなかで、ルテンしているものである。だから「里」の言葉遣いでは、シンラバンショウといったほうがよほど正確なのだけれど、今日の社会では、とりあえず自然と記しておく他ない。

9 こんな問題は、「里」にはたくさんある。おそらく、それは仕方のないことなのだろう。なぜなら、「里」の世界は、しばしば、知性によってとはえられない性格をみせるのだから。ところが言語の概念は知性と結びついている以上、「里」にある根源的なものを表現しようとするとき、言葉には虚しさがつきまとう。「里」は、論理性を超越した、すべてのものが相互性をもちながら存在する時空のなかにある。知性だけでは到達できないような。だから私の魂は、たえず「里」に降りたがっている。

4 現代人は、一度、このような「里」を捨てようとした。それが進歩だと私たちは教わった。私たちは「里」を捨てて、もっと広い世界に出ていかなければいけないのだと。ようやく、その虚しさに気づいてきた。もちろん私たちは、広い世界で活動すること

第二問

ができる。私たちの前には、都市があり、世界がある。△が広い世界とは深い世界だったのだろうか、いま私は問い返す。私たちは、広い世界に目を奪われて、深い世界を失ったのではなかったのかと。

13 帰りたい世界をもちながら、広い世界で活動することもできたはずだ。人生をやりなおせる場所をもちながら、知性によつて自己を主張しなくても、自然に自分の存在を諒解できるような場所をもちながら、広い世界で動くこともできたはずだ。しかし私たちはそのようには教わらなかった。〈里〉と、都市やインターナショナルなものとは対立しているように教わった。

⑫ その結果、私たちは何を得たのか。帰属だけがある。だが所在不明。知性は訳知りだから、帰属のなかに自分の存在をみつけどす。ところが魂は「訳」を超越している。「訳」だけでは存在の場所をみつけどせない。知性がつくりだしたものは、こういう世界であった。何か根源的なものが欠落している。すべてが私たちの手のなかにあるのに、つねに何かがない。私たちの社会は、根源的なところで敗北していたのではなかったか。

15 おそらく、そんな思いが、現在私たちに（里の在外）を探させている。私はそう感じている

問一 傍線部 a ～ d のカタカナを漢字に改めよ。

a

b

C

d

問二 傍線部1「里」を筆者はどのような場所と考えているか。その説明として最も適当なもの

のを、次の中から一つ選べ。

イ 豊かな自然が残るものの、他の地域の人々を寄せ付けず、自己主張も許されない閉鎖的な場所。

口 そこに帰ることで魂が休まり、無限の可能性をもつ未来へと人々を駆り立てる知性を奮い立たせるような場所。

広い世界で活動し、人生の根源的な豊かさを獲得するためには、振り捨てていかざるをえない場所。

二 知性によって自己主張しなくても、自然に自分の存在を了解でき、人生をやりなおせるような場所。

ホ　そこに帰っても自分自身の存在まで変わるわけではないが、魂の休息のため人々が帰りたいと思う場所。

問三 傍線部2「そのようなものを魂と表現するのは不当なのかもしれない」とあるが、筆者は「魂」をどのようなものと捉えているか。その説明に当たる二十字以内の表現を、本文中から抜き出して記せ。

問四 傍線部③「この言葉も不適當な氣がする」とあるが、それはなぜか。七十字以内で説明せよ。

① たといえば 句いのユートピアといったものがありうるだろうか。
② そもそも 句いというものがそう簡単に馴致されたり管理されたり、ユートピアのような理想社会の体系のなかにとじこめられたりするものだろうか。

2 そもそも匂いというものがそう簡単に馴致されたり管理されたり、ユー・ト・ピアのような理想社会の体系のなかにとじこめられたりするものだろうか。

自然界のあらゆるものは、多かれ少なかれ匂いをもつ。その自然界を脱し、みずからの

自然をつくりなしてきた人間というものもまた、時々刻々、さまざまな匂いを発している存在である。人間の社会生活そのものが、多種多様な匂いの発生源である。食品や塵芥や

肥料や家畜や乗物や隣人や、家事や産業や、グラクや宗教や、イリヨウや美容や風俗や、そ

の他あらゆるものやことがらの発散する匂いのなかで、人間は人間であることを実現し実

感じているのだともいえる。匂いとは、人間の個と社会につきまといつづける見えない自

然、生理※のようなものであろう。

とすれば、いったいどのようにして、このつきまといはびこる奇妙な生理的自然とのあ

いだに、人間は、ユートピア的な防壁を設けることができるのだろうか。

5 ユートピアとは何か。文明が、いやすくなるともヨーロッパの都市文明が、成立このか

た エイエイとして追いついてきた、ただひとつの完璧な社会制度の夢想であり、

A
である。ほとんど強迫観念のようなもの、
*
といつてよいかもしれない。

人間はかつて森を出て自然を対象化して以来、人間自身をふくむ自然を徐々に改変する

イ 知性によって自己主張ばかりしているうちに、自分の存在の場所を見失い、政治や経済

においても根源的な敗北を余儀なくされているということ。

都市や世界ばかり意識しているうちに、自然環境を破壊してしまったため、根源的に帰る場所を見失った虚無的な生を強いられているということ。

ハ知性で未来の可能性を追求するうちに、根源的などころで生きる意味や根拠を見失うなど空虚な存在となってしまったということ。

二 都市生活のなかでの居場所は明確に自覚していても、広い世界のなかで自分が存在する場所を見失い根源的にうつろな生き方を強いられているということ。

ホ 知性の作り出した人工的な世界に依存し、魂の所在を忘れて邁進するうちに自己主張を支える深い根源的な知性を見失ったということ。

[illegible]

『匂いのユートピア』

〔著者出題歴〕

• 早稻田大学
• 西南学院大学